

「日の出の森・支える会」は、東京都西多摩郡日の出町にある巨大な処分場が引き起こした環境汚染から、自分たちの生命・健康を守るとともに、ごみ問題の真の解決を願って立ち上がった地元住民運動を支援することを目的として、1994年に発足しました。

食品リサイクルのすそ野の広がり と 電力問題

羽村市でバイオガス発電所が稼働を始めるというニュースを9月に聞きました。民間では東京では2例目ということになります。1例目は2004年11月に稼働したバイオエナジー株式会社（工場は大田区城南島）です。この工場が稼働を始めた時、私は見学に行きました。東京湾の羽田飛行場の北にある埋立地に工場があり、生ごみを首都圏から集めてメタン発酵によるガスを基にガスエンジンで発電し、また熱エネルギーを工場内で使用し、ガスの一部は都市ガスとして外部に供給されています。生ごみを燃やさない処理で、またそれがエネルギーにもなる大変理想的なシステムだと思いました。

その後、三多摩地域でもこうした事業が始まらないかと思っていましたがなかなかできませんでした。それが16年たってやっと2例目が羽村市でできたということになります。造ったのは再生可能エネルギー事業のアーキアエナジーという会社で運営は西東京リサイクルセンターという会社が行うことになるそうです。処理能力としては1例目が生ごみ130t/日、発電が2600世帯分、2例目が80t/日、1550世帯分で少し小規模となります。バイオエナジー社ののが住民のいない埋立地の中に建設されたことに比して、羽村市のは工場敷地内とはいえ周りはマンションや民家がある場所です。

よくやれたなと思いますが、羽村は昔「羽村のごみ穴」と言われて三多摩のごみが集められ埋め立てられた歴史があります。こうした歴史を乗り越えて地元も理解を深め同意していたいと会社は説明をしています。同社の事業

日の出の森・支える会 大沢ゆたかを調べてみると静岡県牧之原市にも同様の工場が作られ、今後は愛知県小牧市でも同規模のプラントを検討中という。また、北関東地区でも複数の事業展開を予定しているようです。

こうした食品系のリサイクルによるバイオガス発電はまだ、FIT(固定価格買い取り制度)で優遇されており、1kwhあたり39円で20年間買い取ってくれます。これが現状では大きな魅力です。また、資源となる生ごみも食品工場や大きな販売店の売れ残り食品などを処理費をもらって受け入れています。今後はこうした食品残渣が活かされる静脈産業が作られていくことが大切です。



また一方、原発を生き残らせるような制度の変更も見られます。せっかくこうした非化石燃料から発電をするような仕組みができつつあるのに、「エネルギー供給構造高度化法」という法律ができて、大手の電力会社しか生き残れないような制度になりつつあるのではないかと危惧されています。非化石の新規事業者が地域の人々の雇用も進めている中、こうした制度の変更にも注意を払っていきましょう。